

理論の主体的立場を構築するものであり、また現代児童福祉の基本的な方法論でもある。そこで、このケースワーク理論を児童養護の分野、特に養護施設を中心として展開してみたい。

養護施設は、いわゆる乳児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護することを目的とする施設である。しかし、収容児童の中には、このような条件を負荷しているだけでなく、知能障害、情緒障害、放浪癖や非行ないしは不良行為の反覆の危険性のある児童など、素質のないしは主体的なハンディがあつたり、時にはこのような欠陥が複合している児童も少なくない。したがって、今日の養護施設の荷負うべき役割は、衣食住を確保して彼等の身体的生存を可能にすることはもちろんであるが、その上に一人の児童を将来、性格異常者に、社会的落伍者に、あるいは犯罪者に育てあげる「精神的問題性」を萌芽のうちに摘み去ることである。換言すれば愛情や親切に、人間の心のはたらきに関する知識と社会資源に関する知識を加えた新しい方法 \vee すなわち、ケ

ースワークの導入化の問題である。

元来、ケースワークはクライアントが必要とする特殊な社会扶助を訓練されたケースワーカーが与える過程である。ケースワークの焦点は、サイコセラピーのように個人の内的苦悩というよりも社会環境という外的問題性にむけられる。したがって、社会扶助を与えるにはクライアントのパーソナリティを変えるよりも、純粹に現実水準で環境問題を取り扱おうとしてきた。しかし、前述した養護施設の現状を考慮するに、養護施設におけるケースワークは、本質的にサイコセラピー的なものを加味しなければならなくなつた。すなわち、児童の内部での能力が開発されはじめて社会資源を利用したよりよき生活適応が実現可能となるであろう。

要するに、社会事業の一環としての養護施設における精神の技術化の問題、人間形成の技術化論、すなわちサイコセラピー的条件を加味したケースワークの導入化こそ、施設児童の幸せを高めるゆえんではなからうか。